

「安心して行きなさい」(マルコによる福音書 5 章 34 節)

「共にあるという平和」

「はじめてのおつかい」という番組があります。幼稚園児くらいの小さい子どもたちが、親から頼まれたものを、一人つきり(もしくは兄弟)で買いに行くというものです。今まで買い物と言えば親の後に付いて行けばよかったわけですから、突然訪れた状況に子どもたちの心には不安が満ちます。親の助け、親の目がない。自分の歩く道を自分で決めなくてはいけない。いつも歩いている道ですら怖くなり、転んだり、何かを失敗しただけで涙があふれ、立ち止まってしまう。そんな様子がコーナーの前半で描かれています。親(視聴者も)は子どもが奮闘する姿を見てはらはらし、子どもは独りで生きることの難しさを学ぶのでしょうか。

しかし、この難しさは子ども時代にだけ味わうものであると言いきれるでしょうか。独りで生きる。独りで決断し、独りで責任を取らなくてはならない。その辛さやプレッシャーは大人になったからといって失われるものではありません。失敗すれば自分のせい。痛んでいることを周りに知られてはいけない。辛いことも我慢しなくてははいけない。これを「大人だから仕方がない」と言う人もいます。大人になってまで誰かに頼っていては情けないという人もいます。彼らの意見は大人っぽく言えばそうかもしれませんが、本当に正しいのでしょうか。子どもの頃、当たり前を受けていた平和が、大人になったら失われてしまうというのは不自然であると思ふのです。

これは決していつまでも親のすねをかじり続けるべきだなどと言っているわけではありません。年老いた親を助けるのは子どもの義務であると聖書は語っていますからね。ここで言っているのは肉親とあなたの関係ではなく、父なる神様と子であるあなたの関係なのです。キリスト教の教会では神様のことを「お父さん」と呼びます。小さな女の子も、しわくちやおじいちゃんも同じように神様を「お父さん」と呼ぶ。そして同じように神様の前では子どもとして生きるのです。それは実に不思議な光景です。しかし、教会全体に神様に対する信頼が溢れています。自分が一人つきりだった時、神様が共にいて励ましてくれた。自分が困った時、神様が不思議に助けてくれた。自分が生き方に悩んだ時、神様が導いてくれた。こういった「証言」が教会にはあふれているのです。年を重ねれば重ねるほどに神様への信頼は増していきます。この方が父として自分を守ってくださる安心感が確信に満ちて行きます。すると、私たちはこの世がどれだけ変わっていかうとも、神様にある平和を知ることができるのです。

イエス様は私たちが「独りで生きなくては」というプレッシャーの中で生きていることに我慢なりません。だから、私たち一人ひとりを独りでは行かせないのです。「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」(マタイによる福音書 28:20)。どんな時でも私たちと共におられる神様がいます。私たちが痛めば癒し、悩めば慰めと励ましを与え、困難に出会えば乗り越えさせてくださる。この「見守られている」という安心な人生を共に歩みたいと願っております。

チャプレン吉川光太郎





2021年5月1日
 認定こども園福光青葉幼稚園
 園長 横山 一乃

保育理念	受ける愛 与える愛
	愛されていることを知り・愛する者となるために

「好きなことを見つけて動き出す」

風薫る5月を迎えました。青く澄んだ大空に飛行機雲を見つけた子どもたちが、「おおーいどこまで行くの！」と声を掛けていました。見上げるとついこの間までかたい蕾だった枝に、若葉が萌えていました。鯉のぼりが元気よく泳いでいる様子を見た子どもが、「やねよりたかい こいのぼり おおきいまごいは おとうさん・・・」と思わず歌いだす姿もありました。入園当初の硬い表情が少しずつ和らぎ始めてきているこの頃です。とは言え、登園の様子はまだまだ安定したものではありません。晴れの日、雨の日、曇り空の日、時には大嵐の日もあります。様々な感情をあるがままに受け止め「こんな日もあるね。でも大丈夫。大丈夫。」とさりとうけとめていきたいものです。無理矢理にねじ伏せようとしても、その感情はおさまりません。そのような時は、子どもたちがその気になるまでそっと見守る時間も、必要なのでしょう。「泣き終わったらお話を聞かせてね」「お部屋で待っているね」「どうしてほしかったか、教えてくれる」「ずーっと遊んでいたかったのね」等と子どもの思いに共感する言葉をかけています。あるがままを受け止めてもらうことにより、子どもたちは安心して少しずつ心を開いていけると思われるからです。保育者は、自分から気持ちを立て直せるように、自分から動き出せるように、子どもたちの背中を優しく押してあげられるような存在でありたいと思っています。安心できるようになると、周りのことに目が向き「やってみようかな。面白そうだな。」と気付き動き出すことでしょう。

晴天の爽やかな日々、子どもたちは園庭で、畑で、思い思いに、好きなことを見つけて遊ぶ姿があります。今、夢中になって遊んでいる遊びの一つに草花で作る「色水遊び」があります。子どもたちは小さな科学者ですね。チューリップの花びらを集めては、様々な色を作り出しています。また、いろいろな葉っぱを見つけては、微妙に異なる色を比べたり、混ぜ合わせては色の変化を楽しんでいます。たんぽぽの花びらを入れたらどうなるかな？と予測しながら実験を繰り返してもいました。気の合う友だちと自然界からの刺激を受け、自分から興味をもって主体的に関わる「色水遊び」は楽しく、満足のいくものとなったことでしょう。幼児期には、充実感や満足感を味わえるような体験を積み重ねながら、感じたり、気付いたり、分ったり、できるようになって欲しいと願っています。そして、そのことを使って、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりして、学びに向かう力を身に付けて欲しいと願っています。このような直接体験は、科学的な見方や考え方の芽生えを培う基礎ともなることでしょう。好きなことを見つけて心を動かして遊んで欲しいと願っています。